



第3の成長期に向けて始動

◆2007年7月期中間決算の実績

当社は、創業以来半導体製造装置の開発を手掛け、最初の20年近くは研究開発用途向けの装置を製造していた。その後、ジャスダック上場後には、生産用途向けにも進出、この中間期は、生産機市場に参入でき、新しい企業成長が始まったという状況である。

中間期の実績は、売上高21億12百万円（前年同期比46.1%増）、営業利益2億98百万円（同250.6%増）、経常利益3億3百万円（同238.3%増）、中間純利益1億73百万円（同243.2%増）となった。

売上、利益共に大幅に増加している。これは当初の予定よりも2年くらい遅れたが、予想通りの成長軌道に乗ってきたといえる。営業利益、経常利益共に大幅増益となったが、利幅率の高い製品があるので、今後さらに利益率の改善を図っていけると考えている。

製品別売上高では、CVD装置、エッチング装置、洗浄装置が主要3品目であるが、CVD装置は5億19百万円（同27.5%増）となった。エッチング装置は11億15百万円（同68.1%増）、洗浄装置は2億86百万円（同60.5%増）と、大幅な増加となっている。

用途別売上高では、研究開発用が5億43百万円（同18.2%減）、生産用が13億78百万円（同135.5%増）と、研究開発用が前年同期比では若干減っている。生産用が大幅に増加しているが、これは当社が3年余りの時間を費やして製品開発に努め、サービス体制の充実を並行して進めてきた結果である。売上高構成比では、生産用が65.3%と過半数を占め、研究開発用は25.7%、その他が9%となっている。

分野別では、オプトエレクトロニクス分野（LED、半導体レーザーなど）が6億59百万円（前年同期比46.9%増）と増加した。海外においてLEDの活発な投資が行われている一方、国内では半導体レーザーの投資が活発であったことを反映している。電子部品分野（各種センサー、MEMS、SAWデバイス、高周波デバイスなど）は、引き続き工場建設、生産能力増大を目的とした設備投資が行われ、6億76百万円（同306.3%増）と大幅増となった。シリコン分野（欠陥解析、三次元LSI、Siなど）は2億円（同44.4%減）、表示デバイス分野（有機ELなど）は87百万円（同18.9%減）、実装・表面処理分野は1億56百万円（同306.4%増）となっている。

地域別売上高は、構成比で国内が76.9%と主であるが、そのほかアジア18.6%、北米4.1%、ヨーロッパ0.3%で海外合計は23.1%となっている。売上高の前年同期比伸び率では、国内が31.0%に対してアジアが115.6%、北米が169.9%で、海外合計は136.7%となった。明らかなことは、生産機が国内のみならず海外でも市場を開拓しつつあるということであり、特にアジア市場は大変大きな伸びとなった。

この中間期で注意すべき点は、売上総利益率が若干低下している点（前年同期48.0%から中間期45.3%）である。これを下期は50.3%に改善したいと思っている。その対策としては、製品価格の見直し、原価の低減を考えており、売上高総利益率50%前後は、来期、再来期も維持したいと考えている。

◆新市場への取り組み状況について

当社は、2004年12月に社名をサムコインターナショナル研究所から現在の「サムコ」に変更、05年2月には生産機事業部を新設、開発からサービスまでを一貫して担当する専任部署をつくった。それをサポートする製品サービスセンターを新設（06年3月）、これが24時間体制で稼働している。こうした一連の施策の芽が出始めたのが昨年4月である。当中間期はそれを裏付ける業績となり、受注残が増えており、今期末で15億～16億円を見込んでいる。これは、生産機の寄与が大きいとみている。

受注環境は、昨年春あたりから一貫して改善している。これまでは8月の夏季休暇、お盆といった季節要因により、コンスタントな受注・出荷の流れができなかったが、昨年の期首あたりから完全に改善されて、毎月一定の水準で出荷ができる平準化が、ほぼ出来上がっている。

また、昨年秋には中国の清華大学（北京市）とナノテクノロジー分野の共同研究を開始した。今のところは、サムコの装置を使用した学生が将来、中国国内で、工場、大学、研究機関に出向いて、サムコの製品を使っただけという、10年ぐらい先を見た事業の布石である。

◆2007年7月期通期の方針

このところ海外売上高が伸びてきており、中でもアジア市場では、台湾が大変な勢いで伸びている。そして、北米市場は、ナノテクを中心に市場は大きく、現在拠点のある西海岸から、今後は東海岸の市場を開拓していこうとしている。欧州は、引き合いは多いものの、アジア市場が好調なことから、本格的に注力していないが、将来的には、欧州への販売にも力を入れていきたい。

当社の注力分野としては、まず光・高周波デバイスといわれる分野がある。これはLED、LD（半導体レーザー）、あるいは高周波デバイス、HEMT、HBTといった、化合物半導体にかかわる分野で、材料としては特にガリウムヒ素などが使用され、最近では材料開発が大変な勢いで進歩している。当面5～6年は窒化ガリウムが主力のデバイスであるが、さらに5～10年先は新材料が出てくると予想される。こういったLED、LD市場であるが、台湾を中心とした海外、国内を含めて大変に伸びている。

次に電子部品分野は、SAWデバイス、水晶デバイス、MEMSの分野である。加速度センサー、ジャイロセンサーといった分野がこれから伸びるとみられている。その加工のためのディープエッチャーを、当社はロバート・ボッシュからライセンスを購入し、積極的に拡販している。この分野は、国内よりも海外での需要が見込まれ、この分野で数年のうちにトップシェアの獲得を目指そうと各種の対応をしている。

シリコン分野は、三次元構造をしたLSIデバイスの開発あるいは製造を進めているところである。現在、数社に実績ができており、今後の展開次第では、非常に大きな成長が見込まれている。また、欠陥解析は、シリコンパッケージを解析する手法であり、CMOSデバイスあるいはCCD素子の製造プロセスである。こういった分野でも、当社は豊富な納入実績を持っている。

◆中期経営計画

2007年7月期は、売上高41億円、経常利益5億80百万円、当期純利益3億48百万円、続いて08年7月期は、売上高46億円、経常利益7億82百万円、当期純利益4億69百万円、09年7月期は、売上高60億円、経常利益12億60百万円、当期純利益7億56百万円という計画である。

09年7月期は伸び率が一段と高くなっているが、現在、CVD分野において新製品の開発をしており、これが寄与してくると予想している。経常利益率も、今年は14～15%、来期は17%、そして09年7月期は21%を目指している。ちなみに当社は、01年には経常利益率22%の実績を持っており、21%は達成可能な目標と考えている。売上規模の拡大はもちろん重要であるが、当社はどれだけ利益を稼ぎ出すか、1株当たり利益をどれだけ出すか、そういう利益重視の経営を基本としている。利益を確保しつつ売上規模を拡大するということである。

また、海外売上高比率は、09年7月期に35%（現在23.1%）を目指している。

現状は生産機市場の入り口がやっと開いたという状況である。今後引き続き生産機市場へ経営資源の投入を行う。こうして実績を積み重ねるとともに信頼性を高め、サービスを充実する。サムコの製品の信頼性についてはお客様からも確言をいただいている。

今後、業績の拡大とともに発生するさまざまなリスクの発生が予想される。これらに対しては、内部統制の充実、リスク管理システムの強化が必要と考えている。

サムコの将来像としては、研究開発向けの販売にベースを置き、その上に、生産用途向けの販売が確実に寄与してくる。さらに、新規事業として、環境リサイクル、エネルギー分野、バイオ関連への事業展開を考えている。これらは、“薄膜技術”をコアテクノロジーとした分野で、この技術をベースにした新事業の可能性はますます拡大していくと予想している。こうして近い将来に、売上高100億円を目指している。

◆ 質 疑 応 答 ◆

アジア市場の用途別動向はどういう状況か。

アジア市場で特筆すべきことは、台湾のLED市場が非常に活発だということである。台湾におけるオプトエレクトロニクス分野の販売比率は、国内における比率よりも高いと思う。つまり、LEDで、国内の数社と比べても投資の額、数からいっても、台湾メーカーの方が現在では上回っているということである。

（平成19年3月16日・東京）